

中公叢書

## 外山滋比古著 『日本語の論理』

倫哲・独語科 芋川平一

B 6,250頁、680円

### 1. はじめに

外国語の勉強は、同時に自国語を知ることであり、逆にまた、自国語をよく知らなければ、外国語も十分に理解することが出来ないということは、よく言われることである。著者（とやま・しげひこ）は、英文学者としての立場に立ちつつ、同時に幅広い視野の下にこの問題に種々の角度から考察を加えている。それらのうち本書の標題にもなっている「日本語の論理」に関する問題と、「外国語学習の目的」に関する問題に焦点を合わせて、著者の意見を紹介してみよう。

### 2. 日本語の論理

翻訳書を読んで、その内容が理解しにくくて困った挙句、原書を読んでみたら、その方がずっと判り易かったという話がよくある。皮肉なことに、それは〈論理的〉であることを生命とする哲学・思想・社会科学関係の本によくある例である。その際、人情の常として、自分の頭が悪いからとか、論理的思考力に欠けているからとか、認めたくないものだから、「わるいのは、非論理的な日本語のせいである」などと、母国語にとんだヌレギヌを着せてしまい易い。しかし、論理は、それを表現している言語と不即不離の関係にあるのであって、抽象的・普遍的論理というものが存在するのではなく、特定の言語によってあらわされた論理があるだけである。それゆえ外国語を無理に翻訳しようとすると、日本語でない日本語になってしまう、しかも、原文のロジックも乱れてしまうのである。

そこで日本語の特徴をいくつかあげてみると、第一に、西欧の言語が名詞中心構文であるのに、日本語は動詞中心の性格が強いということである。たとえば「この事実の認識が問題解決に貢献する」というのが

名詞構文なら、「これがわかれば問題はずっと解決しやすくなる」というのが動詞構文である。前者は、硬い論理をあらわすのに適しているが、といて、論理は硬いものと決めてかかるのは間違いである。第二に日本語では、主語は大体において人間あるいは擬人化されたものに限定されている。「明日が彼女に幸福をもたらす」というような、抽象名詞や無生物が主語になる文は、日本語では普通ありえない。言いかえると、日本語の動詞は、いつも人間を主語にとることを予想している、人間動詞とも言うべきものである。第三に翻訳というと、センテンスの中だけは語順をかえて日本語化をはかるが、センテンスの順はまず決して入替えない。語順をかえなくては日本語らしくならないのなら、文順も適宜変更しなければ日本語らしくならない筈なのに、そちらには手をつけないのだから、難解な訳文になるのは当然なのである。そして、第四に、基本的なことであるが、日本語の論理を西欧語と比較すると、後者の線的論理に対して、日本語のそれは点的論理ということが出来る。ちょうど家族同志の会話を第三者が聞けば何のことも判らぬような省略の多い飛躍した言い方をしているが、当人同志では話は通じ合っているようなものである。点的論理の背後には、実は陥没した線的論理がかくれて下敷になっている。そして点を統合して線と感ずるところに、表現理解の創造的性格がひそんでいる。どんなにしても踏み外すことのない太い線をたどることがおよそ退屈であるのと対照的である。また、西欧語の論理を、洋紙に引いた線とすれば、日本語のそれは、海綿に落した点であると言ふことが出来よう。一箇所にインクをつけると広がってにじむ。離して点を打つと、それがつなが

て面と面との接触がおこる。縁語による連想である。(一連句の世界)。連句はアタラメな論理をもっているのではなく、受け手の精神を活発に働かせる独自のロジックをもっている。映画の天才エイゼンシュタインが、モンタージュ理論を唱えて世界を驚嘆させたのはこの独自のロジックに注目したからである。

この論理の世界は、また多元論の世界と言うことが出来る。連句でいえば、前の句がAの世界を読んだとすれば、次の者はA-1という一元論的延長線上の句を続けるのではなく、A-1をふまえながら、あえてそれを外したBを続ける。これを連句では「うつり」「匂い」「ひびき」とか呼んでいるが、こういう多元的とり合わせの論理こそ、日本人特有の論理であり、それは日本人の美意識(たとえば、ぼたんに唐獅子、竹に虎など)や、宗教観(神仏の混在)などにもはっきりとあらわれている。一元論の世界からみれば、日本人の多元論の世界はアイマイであり矛盾であるかも知れないが、日本人の発想は「あれか、これか」よりも、むしろ「あれも、これも」という多元的・立体的構造をもっているところに特徴があるのである。

そのところを理解せずに、日本語は非論理的であるとか、主体がアイマイであるとか、と決めてしまうことは、西欧の物差しでみた偏見と尋うべきであろう。

### 3. 外国語学習の目的

近年、役に立つ語学を求める社会の声が大きくなっている。学校の外国語教育も、以前にくらべると、いちじるしく実際面が強化されてきた。それはこれまで遅れていた方面についての改善として評価されるべきであろうが、その反面、このために語学の意義はかえって見失われるようになったことも事実である。

たとえば、語学教育にナチュラル・メソッド(自然教授法)というものがある。幼児が母国語を覚えるように外国語も学習すべきであるという考え方に基づいている。しかし、このように母国語と外国語とを同一視することは問題である。そもそも外国語は意識的学習を要する点で、幼児の言葉と違い「不自然」なのである。

ところで、ソシュールの言語区分に従えば、言葉にはパロール(活用言語)とラング(知識言語)とがある。パロールの組織化・体系化されたものがラングである。このラングをさらに抽象化し体系化したのが観念の体系である。芸術・学問・思想などの文化がすべてここに集約されている。この世界をかりにメタ・ラング(上部言語)と呼ぶことにする。

さて、母国語を覚えるのはパロールからである。これは具体的事象と密着していて、言葉が事象かどちらか一方を引出すと、他もそれと一緒に思い浮べられる関係にある。これに対して、外国語の学習はラングから始まる。母国語の感覚的・具体的なのに対して、外国語は観念的・抽象的である。実用性を重んずる語学

ではパロールの学習に重点をおくが、しかし幼児でない者が、どれほど心掛けても、幼児そっくりを真似ることは不可能である。

もし、外国語学習者が、ラングから学習を始めて、そのあとパロールへ戻らないで、直ちに象徴・昇華の方向をとってメタ・ラングへ向うならば、現実から始まってパロール→ラング→メタ・ラングに至らなくてはならない母国語人より、より早くメタ・ラングに到達出来ることになる。通常は、この差が外国語学習者の不利な点と考えられているが、それは語学の目標をメタ・ラングでなくて現実におくからで、考えようによっては、これが語学の有効性を自から限定、あるいは放棄しているとも言えよう。

母国語では、いつしか言葉に事物の代行機能が発達していて、言語 = 事物の性質を帯びているのに対して、外国語の言葉は、裏付けとなるべき事象との関係が稀薄であるため、記号性が強く、観念的である。しかし、このような外国語の観念性は欠点ではない。外国語はいわば質量の伴わない虚の世界である。母国語が拭っても拭っても落ちない連想や慣用に苦しむとするならば、そういう固定した関係から離脱するには、虚の言葉、象徴性の純度の高い外国語が有効な手段となる筈である。こういう効用に注目するならば、同じ外国語を読むにしても、新聞雑誌など現実的背景の濃厚なものよりも、文学作品や思想的書物の方が秀れていることが納得されるであろう。嘘は倫理的に否定されているために、これを言語の本質と考えることにためらいを感じるであろうが、広義の嘘が言えることが、言語の創造機能にはかならないのである。

「人のふり見て、わがふり直す」と言うけれども、英語に対してイギリス人、アメリカ人はインサイダーで案外わからないところがある。われわれが日本語について外国人から訊ねられて、まごつくことがあるのと同じである。従って、もし、われわれが外国語に対して純粹に徹底したアウトサイダーの見方を維持するならば、それを母国語とする人々にとっても、別の角度から見た新しい断面を提示することが出来る筈である。英語の学問的研究が、アウトサイダーであるドイツ人の手によって緒についたように、外国語を学ぶということは、すなわち、言語に対してアウトサイダーの立場をとるということである。これは母国語だけ知っていたのでは、普通ななかなか達しにくい状態なのである。

明治のはじめ、英語にも漢文と同じように調点をつけて読もうとしたが成功しなかった。しかし、語順の大きく異なる英語を日本語で解釈するには、語順入れ換えについての一定の規則をつくる必要がある。そこで生まれたのが、いわゆる英文解釈法である。その英文解釈法が、現在はせいぜい受験参考書のための便法的なものにしか考えられていないのは惜しい。これ

を洗練、整備して、日英両語の意味論的特質を明らかにするための方法論にまで高めて行き、さらには、二つの文化の間の相互の特色を対照的に明らかにする文化解釈論的方法的基礎に展開することも不可能ではあるまい。

——◇——

以上、著者の論旨を要約してきたが、どうも紹介文の方が、原文よりも固苦しくなってしまったようである。原文は、やさしい文章で、例証・話題も豊富で、説得的である。この問題に関心のある諸君は、ぜひとも直接、原文に眼を通して欲しい。ここで取上げた問題以外にも、いろいろと教えられる点が多い筈である。

## 『エネルギー危機 と今後の社会』

4 E 手代木 庄一

” ” 伊 藤 俊

### (1) 資源とは何か

最近になって、エネルギー危機ということが、盛んに言われるようになった。物は使えば消耗する、いわば当然のことであるが、なぜ急にこのようなことが言われるようになったのか、その原因を探り、さらに今後の我々の社会のあり方について、考えてみよう。

エネルギー問題について考えるためには、まず第一に「資源とは何か」ということを明白に定義しなければならない。

世間一般の考え方では、資源といえば鉄鉱石、石炭、石油といったような、いわゆる地下資源をさすようである。これは決して誤りではないのだが、資源という言葉の本当の意味は、必ずしも地下資源には限定されない。資源とは、物質の源泉の意味であり、人間生活に必要な物質を生産してくれる源泉はすべてを資源というべきなのである。上述の地下資源は、もちろん重要な資源であるが、それ以外にも、たとえば水資源、土地資源などという、それなくして人類の生活が成り立たない重要な資源があることを忘れてはならない。

資源というものが、生活必需物質の源泉であることから、それは当然、人間の暮らし方と密着している。人間に使われないものは、資源とは言えない。たとえばここに、ある種の珍しい金属があるでしょう。だが、その金属の用途がない限りにおいては、それは資源に

はならない。ところが、一度その金属に用途が出来たとすれば、それはその日から資源になり得るわけである。そのよい例がウラニウムである。この事実を裏返しにすれば、現在は重要な資源であっても、何等かの理由によって用途がなくなれば、一朝にして資源たり得なくなることもあるわけである。いずれにせよ、このような新用途の発見とか、代替品の造出とかは技術発展の結果によるものであるから、結論として、資源というものは、技術発展の段階に応じて変化するものであるとってよかろう。

### (2) 再生資源と消耗資源

次に、資源をその性質上から、二種類に大別してみよう。

川の水は、使っても使っても、あとからあとから流れて来る。流れる量には限りがあるが、その範囲内であれば、水の流れは永久に続く、その水を使う水力発電は何時までも続けられるし、水田からは毎年米が収穫できる、このような資源を再生資源と呼ぶ。

これに対し、石炭、石油、鉄鉱石、銅鉱石など、いわゆる地下資源といわれるものは、採掘しただけ減少して行き、いつかは全部が掘り尽くされてしまう時が来る。埋蔵量が大きく、採掘量が少ないなら寿命は長い、それにしても無限大の寿命は持ち得ない。この種の資源を消耗資源と呼ぶ。

資源利用という観点から見れば、再生資源は細く長く、消耗資源は太く短く利用する傾向が見られる。再生資源に頼って行けば、長い期間安心していられるが急激な利用拡大はむずかしい。一方、消耗資源に依存すると、需要の急増に対処することは比較的容易だが寿命の長短はあるにせよ、いつかは枯渇する時が来る。このため、消耗資源を利用するならば、それが無くなる前に、新しく鉱脈を見つけ出しておかねばならない。

### (3) 危機の実態

現在言われているエネルギー危機とは、一言で言えば、この消耗資源、特に石油の供給不足を指すのであるが、ではその実態はどうであろうか。それでは本題に入り、危機の実態を探ってみよう。以下に示すものは「ローマ・クラブ」<sup>⑧</sup>の考え方に基づくものである。

消耗資源の中でも、エネルギー資源については、将来に対して非常に厳しい、楽観を許さない情勢にある。破局は、消耗資源の枯渇によって引き起こされる。つまり、幾何級数的成長を続けた結果、工業資本ストックは、資源の莫大な投入を必要とする程に増大するがその成長過程自体で、使用可能な資源埋蔵量の大部分は底をつく。資源不足が深刻になるにつれて、資源不足のための投資が増加し、結局、成長のための投資を行なう余裕がなくなり、工業生産に依存する農業、サービス部門の機能が低下する。一方、人口の爆発的増加（今世紀末には、現在の人口の二倍になると予想される）により、一人当たりの食糧や健康維持のためのサ

ービスが不足し、このため死亡率が上昇し、人口は減少することになる。これには、核エネルギー利用により資源確保が無制限になる、汚染防止が強化される、あるいは土地の生産性が倍増する等の技術進歩や、産児制限といった政策も考慮されている。しかし、このような仮定を導入しても、結局、人口と工業の成長期間を数十年延長するにとどまることになる。(別掲グラフ標準計算の結果参照)

では、石油だけについてみた場合にはどうか。資源長(別掲)にみる通り、年平均3.9%の増加率で消費が進むと、現在の確認埋蔵量はわずか20年で使い果たすことになる。確認埋蔵量が今後ある程度増加するにしても、耐用年数が飛躍的に延びることは期待できない。現在の見通しでは、楽観的に見ても2000年に全エネルギー供給に占める原子力の比率は四分の一といわれる。太陽エネルギーにしても、石油の枯渇をカバー出来るほどに、利用技術が進むとは考えられない。このままでは、現在の石油から原子力等の新しいエネルギーへの転換がどのように進むかは、全く予断を許さない状態なのである。

#### (4) 今後の対策

それでは、このような現実を踏まえて、今後の対策について考えてみよう。

対策の第一は、もちろん石油の増産である。新鉱床の探査、開発に努力すべきはもちろんであるが、一方で、その探査、開発が経済的に見て魅力的で、投資家の投資意欲を誘うものであるように仕向けてやる必要がある。

第二には、これまで石油との経済戦争において、劣るために斜陽化を余儀なくされている石炭を見直すことである。表に見る通り、石炭は石油に比べて、資源的にはまだ余裕がある。

第三は、原子力を開発して、既成の化石燃料に代替せしめてやることである。ただし、これまでの核分裂(ウラン燃料)では、思ったほど大きな量は期待できないので、同じ核分裂の利用でもより効率の高い高速増殖炉を完成させるとか、さらに進んで、核融合の実用化に進むことを考えなければならない。

第四は、エネルギー利用効率の向上である。これまでの火力発電方式では、燃料の熱エネルギーの40%程度しか電力にならなかったが、たとえば燃料電池を実用化すれば、効率は60~70%が期待できるから、同じ電力量に対し、燃料消費は70~60%に節減できる。

だが、以上のような対策だけでは、エネルギー危機に対する根本的対策にはならないように思われる。石油を増産しても、原子力を開発しても、又、いくらエネルギー利用効率を向上してみても、エネルギー枯渇の日、即ち人類が滅亡の危機に直面する日を、しばらく延長出来るにすぎないのである。もちろん、これらの対策も必要であるが、人類の恒久的繁栄を望むの

であれば、社会の考え方そのものを根本的に改め、現在の、工業中心の社会の大改革を行なう必要がある。

エネルギー利用の面でまず必要なことは、消耗資源のみに依存した現在の工業を、再生資源を積極的に利用するようにさせることである。いつかは枯渇する消耗資源に頼っていたのでは、工業そのものが成り立たなくなる日が来るのは避けられない。これを避けるには、再生資源を消耗資源に代替せしめてやるしか方法はない。具体的には、太陽熱、地熱、風力、潮汐、波、海流などの自然のエネルギーを最大限に利用することである。技術的問題も多いが、実現化への努力が期待される。

精神的な面で重要なことは、人類が無制限な欲望を抑制することである。人類の無制限の欲望を満足させるには、この地球はあまりにも小さ過ぎる。物質的欲望を満たすことだけに専心し、いたずらに貴重な資源を浪費することは、人類自らの滅亡を早めるだけである。人類は、精神的な面で満足を見出すように努め、エネルギー資源を含めて、資源の利用は、繁栄のために必要な最小限度にとどめるべきである。

また、工業の発達につれて、軽視されるようになって来た農業を見直すことも、それ以上に必要ではないか。再生のきかない消耗資源を莫大に消費し、自然に調和せず、これを破壊する工業を、これ以上拡大することには無理があろう。自然に調和し、さらに自然そのものを最大限に利用する農業にこそ、人間の本来の姿があるのではないだろうか。その意味において、エネルギー危機に象徴されるような、ゆがんだ工業中心の社会から、農業生産を主体とするような社会へ脱皮を計ることが、人類を滅亡の危機から救う、最も賢明な道ではないだろうか。

#### (5) 我々の認識すべきこと

最後に、我々がエンジニアとして工業社会へ出ようとする際に認識すべきことは何か、考えてみよう。

我々は、工業社会に生きようとする者である。そのためには、工業というものの原点に帰り、何のために技術革新を行ない、又何のために物を生産するのかを常に頭に入れておく必要がある。これらが全て人類のためであることは言うまでもないが、ただいたずらに増産を繰り返すのでは、逆に人類の滅亡を招くだけに終わることは明らかである。現在ほど資源を浪費しなくとも、技術の発達、ひいては人類のより以上の繁栄は可能であるはず。したがって、資源をより有効に使い、人類により役立つものを作り出すこと、これが我々に課せられた最大の課題ではないだろうか。

注 「ローマ・クラブ」日本の10名を含む世界各国の著名な科学者、経済学者、教育家、経営者などにより構成され、環境破壊、汚染、エネルギー危機等について研究し、助言を行なう事を

目的とする。メンバーは91名。1968年にローマで発足。近く第四回大会が東京で開かれる予定

である（10月24日～27日）。

参考資料 新世紀社「原点」73年6月号

## 資 源 表

1 資 源	2 現 存 埋 蔵 量 (a)	3 静 態 的 耐 用 年 数 指 標(b) (年)	4 予 想 成 長 率 (年平均) (c) 高 平均 倍			5 幾 何 級 数 的 耐 用 年 数 指 表(d)	6 現 存 埋 蔵 量 を 5 倍 に した 場合、幾 何 級 数 的 耐 用 年 数 指 数 (年)
アルミニウム	1.17×10 <sup>8</sup> トン	1000	7.7	6.4	5.1		55
クロム	7.75×10 <sup>6</sup> トン	420	3.3	2.6	2.0	95	154
石炭	5×10 <sup>12</sup> トン	2300	5.3	4.1	3.0	111	150
コバルト	4.8×10 <sup>6</sup> トン	110	2.0	1.5	1.0	60	148
銅	308×10 <sup>6</sup> トン	36	5.8	4.6	3.4	21	48
金	353×10 <sup>6</sup> トロイ・オンス	11	4.8	4.1	3.4	9	29
鉄	1×10 <sup>11</sup> トン	240	2.3	1.8	1.3		173
鉛	91×10 <sup>6</sup> トン	26	2.4	2.0	1.7	21	64
マンガン	8×10 <sup>8</sup> トン	97	3.5	2.9	2.4	46	94
水銀	3.34×10 <sup>6</sup> フラースク	13	3.1	2.6	2.2	13	41
モリブデン	10.8×10 <sup>6</sup> ボンド	79	5.0	4.5	4.0	34	65
天然ガス	1.14×10 <sup>12</sup> 立方フィート	38	5.5	4.7	3.9		49
ニッケル	147×10 <sup>6</sup> ボンド	150	4.0	3.4	2.8	53	96
石油	455×10 <sup>9</sup> バレル	31	4.9		2.9	20	50
ブラチナ	429×10 <sup>6</sup> トロイ・オンス	130	4.5	3.8	3.1	47	85
銀	5.5×10 <sup>6</sup> オンス	16	4.0	2.7	1.5	13	42
錫	4.3×10 <sup>6</sup> 英トン	17	2.3	1.1	0	15	61
タングステン	2.9×10 <sup>6</sup> ボンド	40	2.9	2.5	2.1	28	72
亜鉛	123×10 <sup>6</sup> トン	23	3.3	2.9	2.5	18	50

(註) (a) 資料 U. S. B. Bureau of Mines,

Mineral Facts and Problems, 1970.

(b) 現在の年当り使用量が続いた場合、

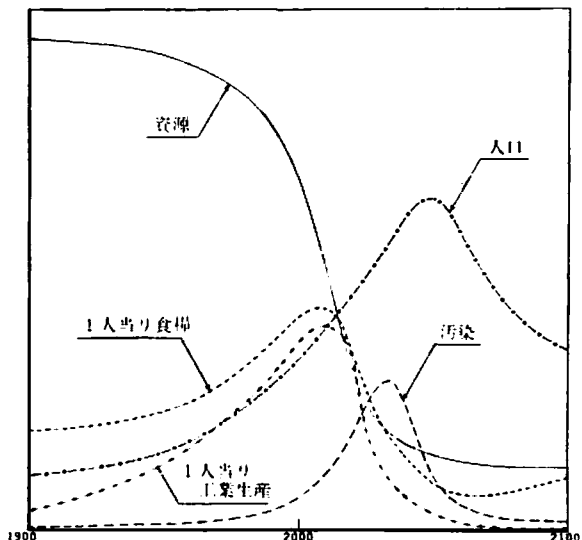
現存埋蔵量がもちこたえる年数

(c) 資料 (a) に同じ

(d) 資源消費の幾何級数的成長が続いた

場合に、現存埋蔵量がもちこたえる

年数



標準計算の結果

# 新着図書目録

図書館のみ所在する図書を  
分類別受入順に記載

## 総記

朝日新聞縮刷版 48-3	朝日新聞社	52 白居易詩鈔	平凡社	121 東京年中行事 2	平凡社
同 48-4	同	53 北京羅城・北京羅城日記	同	122 日本児童遊戯集	同
同 48-5	同	54 香江真澄遊覧記 1	同	123 ラッフルズ佐	同
出版年鑑 1973	出版ニュース社	55 デルスフ・ウザーラ	同	124 長崎日記・下田日記	同
世界の名著 21 ガリレオ	中央公論社	56 太平天国 1)	同	125 義経記 2	同
日本の名著 35 陸奥宗光	同	57 長安城中の少年	同	126 風鑑・創造十年他	同
三枝博音著作集 第 1-11 巻	同	58 水滸後伝 1	同	127 アラビアン・ナイト 5	同
東洋文庫		59 オルドスロ碑集	同	128 モンゴル帝国史 2	同
1 櫻蘭	平凡社	60 京都守護職始末 2)	同	129 改訂 京都民俗志	同
2 唐代伝奇集 1)	同	61 ハリス伝	同	130 天工開物	同
3 魏都七十話	同	62 清俗紀聞 1	同	131 日本事物誌 1	同
4 日本史 1)	同	63 十五子物語	同	132 朝鮮幽囚記	同
5 アラビアのコレンス	同	64 戦国策 1	同	133 日本疾病史	同
6 則天武后・武	同	65 日本史 3	同	134 ベルシヤ逸話集	同
7 ミリンド王の問い 1)	同	66 水滸後伝 2	同	135 明治東京逸聞史 1	同
8 往生要集 1)	同	67 維摩経	同	136 西学東漸記	同
9 名こりの夢	同	68 香江真澄遊覧記 2	同	137 増補・山島民謡集	同
10 搜神記	同	69 幕末外交録 1	同	138 夢酔独言	同
11 太平天国 1)	同	70 清俗紀聞 2	同	139 中国談話選	同
12 善悪鑑	同	71 アラビアン・ナイト 1	同	140 西遊集	同
13 アメリカ彦蔵自伝 1)	同	72 幕末外交録 2	同	141 マッテオ・リッチ伝 1	同
14 南蛮寺興廃記・妙真問答	同	73 ヴェトナム亡国史	同	142 明治東京逸聞史 2	同
15 ミリンド王の問い 2)	同	74 戦国策 2	同	143 香江真澄遊覧集	同
16 唐代伝奇集 2)	同	75 アラビアン・ナイト 2	同	144 中国思想のフランス西漸 1	同
17 東方への私の旅	同	76 昔夢会筆記	同	145 風土記	同
18 大河内文書	同	77 今古奇観 3	同	146 日本中世史	同
19 東方旅行記	同	78 水滸後伝 3	同	147 日本事物誌 2	同
20 明夷待訪録	同	79 加波山事件	同	148 中国思想のフランス西漸 2	同
21 往生要集 2)	同	80 今昔物語集 1	同	149 百済観音	同
22 アメリカ彦蔵自伝 2)	同	81 留日回麟	同	150 玉書	同
23 北京風俗図説 1	同	82 香江真澄遊覧記 3	同	151 中国社会風俗史	同
24 中国英談選	同	83 燕京歳時記	同	152 知恵の七柱	同
25 太平天国 2)	同	84 幕府衰亡論	同	153 続・創造十年他	同
26 長崎海軍伝習所の日々	同	85 アラビアン・ナイト 3	同	154 鳩森道話	同
27 東遊雑記	同	86 戦国策 3	同	155 康照帝伝	同
28 ミリンド王の問い 3)	同	87 江戸参府紀行	同	156 ヤング・ジャパン 1	同
29 板橋雜記 蘇州画舫録	同	88 徳川慶喜公伝 1	同	157 入唐求法巡礼行記 1	同
30 北京風俗図説 2	同	89 今昔物語集 2	同	158 東方見聞録 1	同
31 醒睡笑	同	90 日本大王国志	同	159 東都歳事記 1	同
32 太平天国 3)	同	91 長安の事	同	160 ベニヨフスキー航海記	同
33 欽異抄・執持抄	同	92 鹿洲公案	同	161 中国・朝鮮論	同
34 今古奇観 1	同	93 アラビアン・ナイト 4	同	162 アンコール諸堂行	同
35 日本史 2	同	94 神道集	同	163 モンゴル秘史 1	同
36 蜀碧・揚州十日記・嘉定屠城記略	平凡社	95 徳川慶喜公伝 2	同	164 日本史 4	同
37 金谷上人行状記	同	96 今昔物語集 3	同	165 辛亥革命見聞記	同
38 ナスレディン・ホジャ物語	同	97 日本霊異記	同	166 ヤング・ジャパン 2	同
39 善談	同	98 徳川慶喜公伝 3	同	167 塩鉄論	同
40 夢の七十余年	同	99 香江真澄遊覧記 4	同	168 青木周蔵自伝	同
41 沖繩の史料概	同	100 三十三年の夢	同	169 懐堂日歴 1	同
42 ベルシヤ放浪記	同	101 私の幼少年時代他	同	170 バダヴィア城日誌 1	同
43 謝明録・遊仙窟	同	102 昨日は今日の物語	同	171 日本その日その日 1	同
44 四書五経	同	103 シーボルト先生 1	同	172 同 2	同
45 今古奇観 2)	同	104 今昔物語集 4	同	173 後は昔の記他	同
46 論衡	同	105 明治大正史	同	174 東学史	同
47 魯迅	同	106 東京年中行事 1	同	175 イエズス会土中国書簡集 1	同
48 剪燈新話	同	107 徳川慶喜公伝 4	同	176 ヤング・ジャパン 3	同
49 京都守護職始末	同	108 黄色い雲の精霊	同	177 東都歳事記 2	同
50 絵本江戸風俗往来	同	109 中国古代理語集	同	178 北伐の途上で他	同
51 老残遊記	同	110 モンゴル帝国史 1	同	179 日本その日その日 3	同
		111 日本雑事持	同	180 日本神話の研究	同
		112 今昔物語集 5	同	181 知恵の七柱?	同
		113 新訂・西洋紀聞	同	182 吾菴雜稿性	同
		114 義経記 1	同	183 東方見聞録 2	同
		115 シーボルト先生 2	同	184 金文の世界	同
		116 増訂・武江年表 1	同	185 月と不死	同
		117 シーボルト先生 3	同	186 秋山記行・夜職軍	同
		118 増訂・武江年表 2	同	187 天津事件日誌	同
		119 香江真澄遊覧記 5	同	188 洋楽事始	同
		120 今昔物語集 6	同	189 モンゴル帝国史 3	同

190	イエズス会土中国書簡集 2	河	河出書房新社	学問のすすめ	14	医学のすすめ	筑書房
191	七王記物語	同	同	15	地球科学のすすめ	同	同
192	江戸小地集 1	同	同	18	科学史のすすめ	同	同
193	朝鮮歳時記	同	同	20	化学のすすめ	同	同
194	法顯伝・東蠻行紀	同	本田・鴻壽				
195	菅茶山と柏山隱	同	文庫クセジュ499 カント哲学 自來社				
196	江戸小地集 2	同	竹内良知				
197	騎馬民族史 1	同	同 531 スピノザ哲学 同				
198	国文学全史 1	同	重田英世				
199	続・海邊集・帰去来	同	ヤスバース 理想社				
200	知恵の七柱 3	同	田田輪 アリストテレス				
201	日本の茶書 1	同	その思想の成長と構造				
202	近世輸入伝・経近世輸入伝	同	呉茂 ギリシャ神話				
203	おんな二代の記	同					
204	甲骨文の世界	同					
205	パタゴニア城日記 2	同					
206	日本の茶書 2	同					
207	耳袋 1	同					
208	同 2	同					
209	モンゴル歴史 2	同					
210	イエズス会土中国書簡集 3	同					
211	修験道史研究	同					
212	沖繩書簡集	同					
213	権堂日記 2	同					
214	朝鮮独立運動の血史 1	同					
215	十二支考 1	同					
216	朝鮮独立運動の血史 2	同					
217	江南春	同					
218	アラビアン・ナイト 6	同					
219	断鴻零雁記	同					
220	日本お伽集 1	同					
221	東都歳事記 3	同					
222	朝鮮の非劇	同					
223	騎馬民族史 2	同					
224	抗日戦回想録	同					
225	十二支考 2	同					
226	鳥根のすさみ	同					
227	をなり神の鳥 1	同					
228	騎馬民族史 3	同					
229	日本巡察記	同					
230	イエズス会土中国書簡集 4	同					
231	日本教育史 1	同					
232	をなり神の鳥 2	同					
233	日本お伽集 2	同					
234	白凡湯志	同					
235	モンゴル帝国史 4	同					
236	日本教育史 2	同					
237	権堂日記 3	同					

## 歴史

### JAPONICA

時事百科 1973

## 哲学

田辺元	田辺元全集10-15 プラトーン全集 5	筑書房 全国書房
学問のすすめ		
5	心理学のすすめ	筑書房
19	論理学のすすめ	同
山内恭彦	人間と機械	岩波書店
竹内典久	四書五経入門	日本文芸社
森川哲郎	業融入門	同
小林善彦	ルソーとその時代	大修館
竹田昌司	パスカル〈地獄絵作者の世界〉	石堂純二

## 社会科学

学問のすすめ

13	教育学のすすめ	筑書房
	デマの心理学	岩波書店
	社会運動の心理学	同
	講座教育の現代化と教育工学	
1	教育工学の成立	明治図書
2	カリキュラムと教育工学	同
3	教授活動の機械化	同
4	学習活動の自動化	同
5	教育のシステム化	同
6	新しい教育機器の技術	同

## 自然科学

常識のウソ  
続・同

14	医学のすすめ	筑書房
15	地球科学のすすめ	同
18	科学史のすすめ	同
20	化学のすすめ	同
	量子エレクトロニクス上巻	森山房
	エレクトロニクスの基礎	同
	ブルーバックス B 207	
	動物はなぜ集まるか	講談社
	情報科学講座	
A-1-1	情報科学への道	丸文出版
A-1-2	情報科学の動向 I	同
A-1-3	同 II	同
A-2-5	情報理論 II	同
A-3-2	数値計画法 I	同
A-3-3	同 II	同
A-4-1	最適制御過程 I	同
A-4-2	同 II	同
A-4-3	制御原理	同
A-4-5	適応制御過程 I	同
A-5-1	マルコフ過程	同
A-5-2	確率過程論	同
A-5-3	多変量解析論	同
B-6-1	感覚情報 I	同
B-6-2	同 II	同
B-7-1	遺伝情報 I	同
B-7-2	同 II	同
B-8-1	中枢神経系制御 I	同
B-8-2	同 II	同
B-8-3	同 III	同
B-9-1	バイオニクス	同
B-9-2	人間-機械系	同
B-9-3	生体計測制御機器	同
C-10-1	言語理論	同
C-11-1	情報処理 I	同
C-12-1	ゲーム理論と行動理論	同
C-12-2	情報の伝播	同
C-12-3	記号行動論	同
D-13-1	入出力装置	同
D-13-2	論理素子	同
D-13-3	記憶装置 I	同
D-13-4	同 II	同
D-15-1	経営情報システムの設計	同
D-15-3	オンライン・システム	同
D-15-4	実時間システム概論	同
D-15-6	同 開発	同

吉田正昭 E-17-1 学習理論・学習解析 同  
 小野茂 E-17-3 学習実験 同  
 北川敏男 E-17-4 学習制御および学習制御機械 共立出版  
 共立出版

坂井利之 E-19-1 パターン認識の理論 同  
 同 E-19-2 文字・図形の認識機械 同  
 FSShaw Relaxation Methods Dover Publications  
 James B. Scarborough Numerical Mathematical Analysis The Johns Hopkinspress  
 R A Buckingham Numerical Methods Pitman  
 R I Murray The-motfluid Mechanics Kogakusa Com  
 中崎昌雄 工農化学基礎講座 4 有機化学 朝倉朝倉書店

工 学

佐貫亦男 発想のモザイクー技術開発の民族風土ー 中央公論社  
 星野芳彦 技術と人間 中公新書204 同  
 三輪修 電子計算機基礎講座 9 計算機構成論 共立出版  
 電気学会工場配電専門委員会 工場配電 電気学会  
 応用物理学会 応用物理実験技術ハンドブック オーム社  
 松尾正之 電子回路 朝倉書店  
 大塚儀作 電気材料および部品 同  
 山本賢三 電子回路 I・II 同  
 黒部貞一 半導体回路 同  
 沼倉秀徳 電気材料教室 電気書院  
 渡辺誠 電子工学教室 同  
 和田正信 トランジスタ教室 同  
 電気工学年報 昭和46年度版 電気学会  
 A E H Lore A Treatise on The Mathematical Theory of Elasticity Dover Pub

芸 術

伊藤孝州 入門書道全集 3 草書 実業之日本社  
 宇野雪村 同 6 窮術書 同  
 外山重治・春名好重 入門書道全集 7 書の鑑賞 同  
 福村雲洲 入門書道全集 8 硬筆 同

語 学

日本国語大辞典 3・4 小学館  
 大野誠彦 安部公房

新訳漢文大系 36 孫子・呉子 明治書院  
 吉田賢哉 同 38 史記一 同  
 同 39 同 二 同

文 学

戦争文学全集 1-6 毎日新聞社  
 同 別巻  
 谷崎潤一郎著 訳 青春の記録 中央公論社  
 湯氏物語 1-8  
 1 あしたの墓碑銘 三一書房  
 2 孤独なる渴望 同  
 3 自由の狩人たち 同  
 4 明日への絶唱 同  
 5 未知への飛翔 同  
 6 生きてある証 同  
 7 愛あるところ 同  
 8 わが青春のとき 同  
 高村光太郎選集 1-6 春秋社  
 昭和国民文学全集 筑摩書房  
 2 大仏次郎集 同  
 13 江戸川乱歩集 同  
 26 井上靖集 同  
 リルケ全集 1-3 筑摩書房  
 片羽文雄 観電 1-5 新泉社  
 山内義雄訳 チポー一家の人々 1-5 白水社  
 現代日本キリスト教文学全集 教文館  
 1 神との出会い 同  
 2 日本への土着 同  
 3 死と不安 同  
 5 信仰と懷疑 同  
 6 自由と虚無 同  
 8 幼年と青春 同  
 伊藤野 日本文壇史 講談社  
 1 開化期の人々 同  
 2 新文学の創始者たち 同  
 3 悩める若人の群 同  
 4 親友社と一葉の時代 同  
 5 詩人と革命家たち 同  
 6 明治思潮の転換期 同  
 7 親友社の時代終る 同  
 8 日露戦争の時代 同  
 9 日露戦後の新文学 同  
 10 新文学の群生期 同  
 11 自然主義の勃興期 同  
 12 自然主義の盛衰期 同  
 13 頤唐派の人たち 同  
 14 反自然主義の人たち 同  
 15 近代劇運動の発足 同  
 16 大逆事件前後 同  
 17 転換点に立つ 同  
 18 明治末期の文壇 同  
 文学世界文学大系 筑摩書房  
 29 バルザック II 同  
 55 シイド・モーリャック 同  
 57 ブルースト I 同  
 66 モーム・ハーディ 同  
 武田幸彦 快樂 1-2 新潮社  
 坂瀬一雄 方丈記解説大成 大修館書店  
 小村昭彦 原色万葉植物図鑑 桜楓社  
 安部公房

新泉社  
 新田次郎 八甲田山死の彷徨 同  
 同 孤高の人 同  
 福永武彦 死の島上・下 河内書房新社  
 有吉佐和子 出雲の阿国上中下 中央公論社  
 丸谷オー たった一人の反乱 講談社  
 吉田精一 現代短歌評釈 学燈社  
 同 現代詩評釈 同  
 同 現代俳句評釈 同  
 岩城之徳 流離の詩人 石川啄木 同  
 字間のすすめ 6 文学のすすめ 筑摩書房  
 吉村昭 高熱疑道 新潮社  
 新田次郎 栄光の岩壁 上・下 同  
 佐多輪子 樹影 講談社  
 水井龍男 コチャパンバ行き 同  
 日本近代文学大系 角川書店  
 20 木下尚江集 同  
 21 徳田秋聲集 同  
 39 佐藤春夫・室生犀星 同  
 50 近代社会文学集 同  
 59 近代詩歌論集 同  
 明治文学全集  
 12 小野梓・大井憲太郎・植木校盛集 筑摩書房  
 70 真山青果・近松秋江 同  
 現代日本文学大系  
 39 島木赤彦・土屋文明・岡豊 同  
 59 前田河広一郎・津水直 同  
 62 牧野信一・権塚足穂 同  
 93 現代詩集 同  
 94 現代歌集 同  
 96 文芸評論集 同  
 97 現代評論集 同  
 現代の文学  
 12 井上靖 講談社  
 23 瀬戸内晴美・曾野綾子 同  
 37 黒井千次・清水邦夫 同  
 ケミュー全集  
 8 ある臨床例・転落 新潮社  
 9 尼僧への鎮魂歌 同  
 10 追放と王国 同  
 折口信夫全集 12-15 中央公論社  
 スタンダード全集  
 6 恋愛論・恋愛書簡 人文書院  
 10 文学論集 同  
 俳句シリーズ  
 人と作品 2 与謝蕪村 桜楓社  
 同 7 飯田蛇笏 同  
 同 17 近代俳人 同  
 同 18 現代俳人 同  
 太宰治全集 10-12 別巻 筑摩書房  
 森村金策 3-5 同  
 福原嘉太郎著作集  
 2 ジョンソン大博士 研究社  
 3 トマス・ブレイ研究 同  
 7 陸奥川・人生・読書 同  
 8 同 VI・日記・基能 同  
 9 英語教育論 同  
 10 英文学評論 同  
 12 英文学の歴史 同